

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531028

研究課題名(和文)一九三〇年代アメリカ日系宗教の二世教育活動

研究課題名(英文) Educational Activities among Japanese Nisei by Japanese Religious Groups in the 1930s

研究代表者

吉田 亮 (YOSHIDA, RYO)

同志社大学・社会学部・教授

研究者番号：00220690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1930年代のアメリカ日系宗教集団による二世教育活動の特徴をあきらかにした。アメリカ化、道徳性、越境性を分析キーワード、ハワイと米国西海岸におけるキリスト教及び仏教会による教育活動を調査した。その結果、地域を越えて、両宗教集団ともに、アメリカの「日系」宗教として、「アメリカ市民性」と「越境性」とを兼備することが強調された。不況下と排日生き抜くため、日米両国の文化資本を最大限、二世に活用させようという姿勢が観察できる。

研究成果の概要(英文)： This study demonstrates the characteristics of the educational activities targeting second-generation Japanese Americans, or Nisei, by Japanese religious groups in Hawaii and the Pacific coast states in the 1930s. In particular, this study investigates those educational activities by examining three factors that determined these activities: Americanization education, moral education, and transnational education. It argues that these religious groups played a role, as “Japanese American” religious groups, in reinforcing “American citizenship” values as well as “transnational” values. Ultimately, this study shows how these religious groups wanted the Nisei to take advantage of the cultural and social resources and influences of both countries.

研究分野：教育史

キーワード：日系人 アメリカ エスニシティ 越境性 エスニシティ アメリカ化 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

従来、第二次大戦以前のアメリカ日本人移民教育史に関する研究は日本語学校史であったと言える程、当該トピックに研究が集中してきた。代表的な研究は Nobuhiro Adachi, *Linguistic Americanization of Japanese-Americans in Hawaii* (1996), 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』(1997), Toyotomi Morimoto, *Japanese Americans and Cultural Continuity* (1997), 坂口満宏『日本人アメリカ移民史』(2001), 小島勝編『在外子弟教育の研究』(2003)であり、日本人移民が現地社会に適応していく過程で起こるアメリカ化の推進や日本語・文化の継承に関わる教育活動や思想を分析したものである。1990年代になって公教育の役割を重視する研究が登場し、Eileen Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity* (1994)は日本語及び公立両学校が二世のアメリカ化に及ぼした影響について、社会変容、文化変容、職業上昇面での特徴を明らかにした。90年代のもうひとつの特徴として、トランスナショナル教育史の視点から、二世による日本留学や研修旅行に関する研究が現れることで移民教育史研究は移民、現地社会、日本という三地域の影響からの検討がなされるようになった。Eiichiro Azuma, *Between Two Empires* (2005)や吉田亮編『アメリカ日本人の越境教育史』(2005), 吉田亮(研究代表)「北米日系二世の日本留学に関する研究」(平成21年度科研補助費, 基盤研究C, 課題番号20530707)などである。これらの先行研究は、日系教育機関の二重の役割や越境関係について重要な示唆を与えてくれるが、30年代の宗教団体の二世教育活動についての研究を含んでいない。

一方、アメリカ日系宗教史研究においては、日系キリスト教や仏教の伝道活動と日

系移民の同化や民族化に関する思想史や社会史的研究が中心であった。同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』(1991), Brian Hayashi, *For the Sake of Our Japanese Brethren* (1995), David Yoo, *Growing Up Nisei* (2000), 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』(2001), Ryuken Williams and Tomoe Moriya eds., *Issei Buddhism in the America* (2010)などである。これらの研究も本研究が課題に対して重要な示唆を与えてくれるが、30年代の宗教団体の二世教育活動について断片的な考察に留まっている。一方、現地宗教団体による二世教育については、吉田亮『ハワイ日系二世とキリスト教移民教育』(学術出版会, 2008)が、二世のアメリカ化に独自の役割を果たした現地キリスト教団体の教育活動を示した。

これら両分野の研究史上において、本研究はほとんど未踏査ともいえるべき30年代のアメリカ日系宗教による二世教育活動を総合的に分析するものである。

2. 研究の目的

本研究では、30年代のアメリカ日系宗教特にキリスト教と仏教団体による二世教育活動の特徴を解明する。1927年に合衆国連邦最高裁はハワイにおける外国語学校取締法に対して違憲判決を下して以来、日本語学校への規制が撤廃され、繁栄期を迎えた。しかし、公立学校とそれを補完する日本語学校だけでは二世教育は不完全であると考えた日系宗教団体は、独自の教育活動を展開することになった。その際に、同時期の日系二世教育の研究において中心となるトピックであるアメリカ化教育、道徳教育、越境教育(日本への留学や研修旅行などトランスナショナル教育)を採り上げる。しかも、カリフォルニア、ワシントン、ハワイという三地域の比較をも行う。

a)アメリカ化教育:日本語学校では実現できないものとして、日系宗教団体は二世青少年組織(YMCA, YMBA, YWCA, YWBA他)を編成したり、二世教会を設立することで、集団活動への参加から得られる協調性や民主的運営、独立心他を実践的に学習する機会を提供しようとした。更に、公立小学校への適応を容易にするための幼稚園教育機関の設立もおこなった。これらの活動についてはほとんど解明されていないので、3地域の2宗教団体毎に青少年教育、

幼児教育活動の特色を明らかにしていく。

b) 道徳教育：日系移民の親は日系の道徳性を修得したアメリカ市民の育成を望み、日本語学校に対しては日本語教育だけでなく徳育も期待した。一方、日系宗教団体は日系アメリカ市民育成には宗教的信条や道徳が必要であると考え、独自に「キリスト教的日系アメリカ市民」や「仏教的日系アメリカ市民」育成を提唱した。国家や民族の枠だけに囚われない、普遍宗教の道徳性の視点を取り入れたアメリカ市民育成であった。この点についても、奥村多喜衛（ハワイ日系キリスト教界指導者）や今村恵猛（ハワイ本願寺指導者）の思想史的研究のみである。本研究では 30 年代に二宗教団体が展開した日系アメリカ市民育成のための宗教道徳の理念と実態を明らかにしていく。

c) 越境教育（日本への留学や研修旅行などトランスナショナル教育）：日本語学校は両親達のニーズに対応するために短期日本研修旅行を企画することがあった。一方で、日系宗教団体は日本の当該宗教団体とのネットワークを活用して、短期日本研修旅行だけではなく日本留学を支援する様々なプログラムを提供した。近年になり、日米学院(仏教)や恵泉(キリスト教)への日系二世留学に関する研究が出てくるようになったが、留学した二世達が帰国後、日系社会にあってどのような活動を展開したか、日系宗教団体は帰米二世の活動にどのように関わったのかについては全く研究がなされていなかったので、実態を解明していく。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたって以下のような研究計画をたてた。各自の分担テーマに即して文献や史料の調査、蒐集及びそれらの分析を独自に行う。最初の二年間については、

毎年 8 月に研究合宿を開催し、各自が調査分析した内容を発表し、他の分担者との討議によって分担者全員が知見を共有できるようにする。合宿で毎年の研究成果を総括し、研究全体を深化させるために各自及び全員が取り組むべき課題を打ち出し、各自が持ち帰って検証する。最後の 3 年目に、研究叢書出版のための研究合宿を開催し、各自の分担テーマの調整を行い、分担論文作成に取りかかる。研究の土台となる資料については、カリフォルニア州日系博物館、ワシントン州日系仏教文書館、ハワイ大学図書館、個別日系キリスト教及び仏教会での資料調査に基づいて蒐集する。

4. 研究成果

吉田は、1930 年代の日系二世キリスト教徒の超教派組織キリスト教青年協議会 (Young People's Christian Conference) を中心とする、二世主導の教育活動を分析した。諸活動を通じて、アメリカ市民性の中心にキリスト教徒の way of life の習得と実践を目指し、現地キリスト教指導者との連携を進めようとする姿勢がみられた。これは、「日系二世」キリスト教の成熟度や質の高さを、現地のキリスト教指導者に宣伝する狙いがあると分析できる。一方で、一世キリスト教徒との連携を重視し、帰米二世や日本語話者グループへの配慮、親の祖国日本の動向に対する注視など、「日系」文化への強い執着と敬意の念がみてとれる。つまり、アメリカ化と越境性をバランス良く維持する姿勢が存在していることが明らかになった。特に、越境性については、日米の「架け橋」という役割を担うために、日本国内のキリスト教プログラムに参画したり、満洲国で中日人の「架け橋」となるために小児園を設立した二世など、極めて積極的に越境教育活動に従事する姿勢がみられることが、わかった。

竹本は、南カリフォルニア地域の日本語学校を統括する役割をもっていた南加日本語学園協会の事業、とくに日系二世のための教科書編纂事業について研究を行った。

主資料として、立命館大学図書館に所蔵されている『羅府新報』の記事から関連記事を調査蒐集し、事業の全体像を明らかにした。次に、カリフォルニア大学に所蔵されている教科書編纂に関する史料を分析した。その結果、教科書の内容が明らかになった。当時、多くの日本語学校は文部省が編纂した国語読本を教科書として採用し、学校毎に自由な教育を実施していた。その中で、南加日本語学園協会は二世を含む三世を対象とした外国語教育としての日本語教科書を新しく編纂しようとした。同協会は編纂方針としてアメリカ人を育成する立場を採用し、日本語学園の一日の生活やアメリカの行事を教科書の内容に取り入れたことが明らかになった。

小島は、「アメリカにおける浄土真宗本願寺派の日系二世に対する越境教育 カリフォルニア州を中心に」をテーマに研究を遂行した。まず、二世開教使の養成を主な目的に設立された「北米開教財団(1929)」の議事録を、全米日系人博物館で閲覧・収集・分析した。次に、日系二世で日本で越境教育を受けた角田昇道、久間田顕了、寺尾英雄、藤本芳彦、増永正公などについて、関係者への聞き取りや関係記事の収集・分析をした。前者では、北米開教 30 周年記念事業として「米国仏教ノ命脈ヲ持タザルベカラズ」と設立が強調され、養成費として各開教使は5ドル出しあったこと、予算として留学費や留学生のための「和光寮」の維持費が計上されていること。後者では、角田昇道は、『Buddhist Church of Santa Barbara Dedication』1967、久間田顕了は、『シアトル別院 十年の歩み 自一九五四年 至一九六四年』、増永正公は、『シアトル別院の歴史 SEATTLE BUDDHIST FUJINKAI 85 TH ANNIVERSARY 1908 - 1993』などから、より経歴を明らかにした。

本多は、「一九三〇年代アメリカ日系宗教の二世教育活動」というテーマで、アメリカ北西部のワシントン州を調査地として、日本人移民の子弟を対象とした 1930 年代の仏教教育に関する研究を行った。同州シアトルにある仏教会を中心に毎年実施してきた現地調査と蒐集した資料の結果を基に、日系アメリカ人 2 世のために開かれた日曜学校を考察対象とすることにした。日曜学校という場は教育の担い手である教員と教育を受ける生徒を教育活動の主体としながら、当時仏教会で組織されていた他の諸団体や日本の本山との関連を緊密に保っていることが明らかになった。研究テーマである「越境」という観点から 1930 年代のシアトル仏教会日曜学校を管見すると、一世(移民)と二世の世代間関係、年代を異にする同一世代内の人的交流、一世と二世の組織間交流、同一宗派の日米の越境の様子がうかがわれる。仏教教育の場でくりひろげられる多彩な越境の姿とそこに関わる人びとの教育観や思想等、資料を通して明らかにした。

物部の研究は、1920 年～1930 年代にハワイの日系アメリカ人が行ったいわゆる「見学団」旅行に焦点を当て、見学団の歴史的変遷と二世に対する教育的意義について考察した。見学団旅行は、二ヶ月ほどの期間に渡って引率されながら日本各地を訪問する集団旅行である。1910 年代は移民世代を対象とした商業的な観光旅行であったが、1927 年頃以降、日系社会の一世指導者が二世を参加対象にして開催した教育目的の研修旅行が主流となっていく、単に名所を巡るのではなく、最先端の日本の技術を知るための工場や鉄工所への訪問、日本政府要人との面会、日本の学生との交流、一般家庭での滞在

などが旅程に含まれるようになった。
1920年代後半、1930年代始め～1930年代半ば、および1930年代末～1940年の三つの時期に分けて、教育目的の見学団の事例研究を行った結果、以下のような見学団開催者の意図が明らかになった。移民世代の知らない発展めざましい最新の日本の姿を見せることにより、二世が日系であることに誇りを持ち、ハワイ社会内での人種的な劣等感を克服すること、一種の文化使節として日本人に対して礼節を持って振舞うことにより、アメリカ市民であることを意識するようになること、普段比較的恵まれた生活を送る二世が三等で船旅をすることにより、船に乗ってハワイに渡ってきた移民世代の苦勞を偲び、日系社会の基礎を築いた親に対する敬愛の念を培うようになる等である。また参加者の二世も実際にそのように感じるようになっており、開催者が期待したとおりの一定の成果が上がっていたということである。さらに1930年代末には、朝鮮、満州への訪問のみならず皇居での奉仕活動も旅程に加わるようになり、帝國的な拡大とともに孤立していく日本の立場を国際社会に向かって説明すべきという一世開催者側の主張が強くなっていったことをあきらかにした。

4. 研究成果

本研究の成果は、研究叢書『越境する「二世」 1930年代南北アメリカの日系人と教育』（現代史料出版）の2016年3月刊行に向けて研究成果をとりまとめ中である

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 亮 (YOSHIDA RYO)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：00220690

(2) 研究分担者

物部 ひろみ (MONOBE HIROMI)
同志社大学・グローバル地域文化学部・
准教授
研究者番号：10434680

小島 勝 (KOJIMA MASARU)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：40140123

竹本英代 (TAKEMOTO HIDEYO)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：50294484

本多 彩 (HONDA AYA)
兵庫大学・生涯福祉学部・講師
研究者番号：90584798

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

